

競争とイノベーション

中国における起業を通じたイノベーションに世界の注目が集まってきている。起業しやすい環境が生まれたことで、スタートアップが増えているが、それは同時に、同業他社間の競争が激しくなることも意味する。競争はイノベーションにどんな効果をもたらすだろうか？

◆ ジェトロ・アジア経済研究所副主任研究員
木村公一朗 ◆

中

国のスタートアップとそのイノベーションに世界の注目が集まっている。

スタートアップ関連情報を提供する米CBIインサイトによれば、世界のユニコーン（企業価値10億ドル以上の未上場スタートアップ）226社のうち、中国発は61社で、米国発の113社に次ぐ第2位の企業数だった。明日のユニコーンを目指して、多くのスタートアップが中国で誕生している。

スタートアップ増加の背景には、まず、世界的な事業環境の変化がある。フィンテックにヘルステックに、シェアリングエコノミーに、多くの新しい製品やサービスが生まれている。有力な先発企業がいなければ、これから事業を始める起業家にも急成長のチャンスがある。また、起業や製品開発のハードルが下がったことの効果も大きい。VC（ベンチャーキャピタル）業の発展や政府の支援など、起業やイノベーションの

ためのエコシステムが充実してきた。

この世界的な流れが生まれたタイミンングで、中国でも事業環境が変化し始めた。まず、賃金高騰の結果、労働集約型産業の発展が行き詰まりを見せるようになった。また、さまざまな製品の国産化と普及が進み、これまでにない製品やサービスを生み出すことへのニーズが高まった。世界と中国の事業環境の変化が合流したことで、起業を通じたイノベーションのうねりはより大きなものになった。

しかし、起業のチャンスが増え、そして、起業のハードルが下がったことで、起業しやすい環境になったということは、他の起業家にとっても条件は同じであるため、（誰もがチャンスをつかめるわけではないもの）同業他社が増えることにもつながる。つまり、競争圧力が大きくなり、自社が淘汰される可能性も高くなる。

もちろん、同業他社の増加はネガティブなことばかりではない。消費者にまだ馴染みのない新しい製品やサービスを広めていくうえで、同業他社の存在は市場開拓の「仲間」になり得る。経営リソースが未だ乏しいスタートアップにとって、他社の力も活用できることのメリットは大きい。

それでも、同業他社はやはりライバルでもある。深圳の起業家に、深圳で起業するメリットとデメリットを聞いてみたところ、まず、メリットとしては、サプライチェーンが発展していることや、人材が豊富なこと、政府の支援が充実していることなど、起業や製品開発しやすい環境に関わるものが挙げられた。つぎに、デメリットとしては、競争が激しいことや、模倣が依然として多いことなど、同業他社の多さに関わることで読み書きする技術（を開発する起業家も、

「深圳はチャンスにあふれているが、競争も激しい。ここに来るなら覚悟が必要だ」と指摘していた。起業しやすい環境のメリットとデメリットは表裏一体だ。

しかし、競争圧力もまた、市場全体や産業全体の成長から見れば、ポジティブな効果も大きい。市場構造が分散的で競争が激しければ、投資期間が長く、リスクも大きいR&D投資は手控えられる可能性もあるが、競争圧力がなければ差別化のための努力が生まれにくい可能性もある。中国では起業家が増え、競争が激しくなっているからこそ、差別化が積み重ねられることで、既存の技術体系とは異なるイノベーションが生まれるかもしれない。

ここで、ひとつの事例として3Dスキャナを取り上げたい。これは立体物を読み込む技術のことだが、ジェスチャーでの入力を可能にするモーションコントローラといった領域も含まれる。この分野へのスタートアップが増えた背景には、第一にマイクロソフトのKinect（ジェスチャーや音声で操作するためのデバイス）などの登場によって3Dデータ取得のコストが下がったこと、第二に大容量・高速のデータ通信が可能になったこと、第三にデータ処理速度が速くなったことなど、技術の成熟がある。お陰で当該分野の事業を低コストかつ素早く構築できるようになった。

この変化にチャンスを見出した董波は？

014年、Cloudream（雲之夢）を深圳で創業し、3Dスキャナの技術を応用したバーチャル試着のソリューションを開発した。ユーザは、モールや衣料品店に置かれた同社の設備で人体をスキャンすれば、その体形データに基づいて、データ化されたさまざまなブランドの衣服を「試着」できる。2017年から、EC（電子商取引）サイトを運営するアリババにも提供しはじめた。

ECの急成長にもなっってバーチャル試着の領域への参入も増えているが、2013年創業のHaomaiyi（好買衣）のアップローチは異なる。ユーザの身長や体重、胸囲などのいくつかの数値と、自分とは無関係な多くの人の体形データをもとに、AI（人工知能）が自身の体形を再構築するというやり方だ。

どのようなバーチャル試着がスタンダードなものになるだろうか。いずれか一方のやり方が残るかもしれないが、両社がお互いにお互いのよいところを吸収しつつ、自社の優位性を伸ばしていけば、これまでにないやり方に進化するかもしれない。競争は各社それぞれのイノベーションの総和以上の結果をもたらす可能性がある。

また、3Dスキャナ業界や製品・サービスごとのバリエーションが未だ確定していない以上、競争や技術の変化によって、誰がライバルになり、誰がパートナーになるのかも流動的だ。Cloudreamは3Dセンサー技術の防犯などへの応用も研究しているが、バリエーションの川上に位置する企業の動向にも注目していく必要がある。たとえば、2013年創業のOribec（奥比中光）は、3Dセンサー・チップとそれを使ったカメラを開発し、さまざまな用途へ応用するためのハードルを引き下げようとしている。3Dスキャナのなかでも、どの技術領域で優位性を築いていくべきか、

中国で新しい産業が生まれるときはいつも、無数の企業が参入し、激しい競争が起き、そして、数多くの企業が淘汰されるが、同時に当該産業の顔となるような企業も誕生してきた。このダイナミズムはこれまで、先進国にはあるけど中国にはまだない産業が形成されるときに作用してきたが、これからは、世界のどこにもない産業を生み出す原動力にもなろうとしている。スタートアップが事業化しようとしている技術のほとんどは、日本にまったくないものではないだろう。しかし、もし日本の起業率の低さが、イノベーションを加速させるような競争効果を小さいものにしてるのであれば、競争の度合いの違いが各国・地域のイノベーションのあり方にあたえる影響も違ったものになる。同業他社の多さという競争環境もまた、エコシステムを構成する重要な一要素なのかもしれない。